

雪の結晶を見た人



昔の人は、雪の結晶をどのように見ていたのでしょうか。今から、2000年以上も前の中国の書物には、雪の結晶が六角形をしていたことが記されています。ヨーロッパでは、天文学者として有名なケプラーが、始めて雪の結晶の六角形に気づいています(1611)。しかし、あの美しい六角形は、創造の神が作ったものと考えました。また、哲学者デカルトも雪の結晶を観察し、スケッチを残しています(1637)。

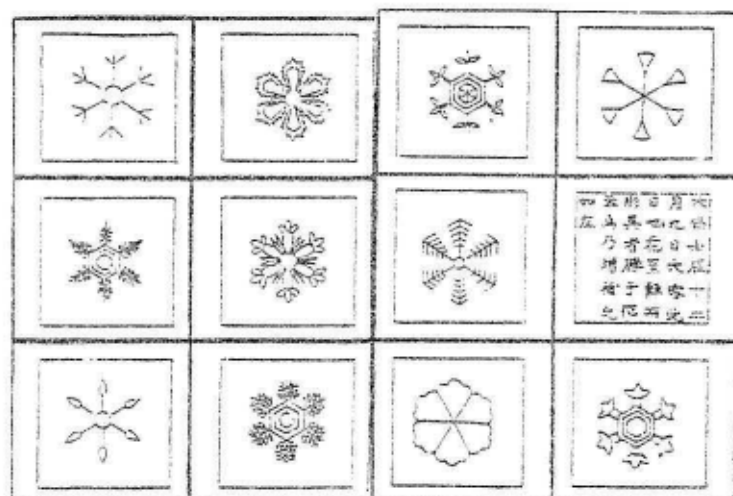
顕微鏡でコルクを観察し、植物細胞を発見したイギリスのフックは、始めて顕微鏡下での雪の結晶のスケッチを残しました(1665)。

その後、顕微鏡写真撮影の技術が考案され、多くの写真が残されています。なかでも、アメリカのペントレーの写真集『雪の結晶』は、2453種類もの結晶が載せられていて今日、私達もその素晴らしさに感動させられます(1931)。しかも、ペントレーは雪の結晶と気象条件との関係を調べ、雲の中の温度によって結晶形が決まることにまで、気がついています。

一方、日本ではどうでしょうか。江戸や京都では、雪月花と呼ばれ風流の対象と見られていたようです。昔から万葉集をはじめ、多くの歌などに詠まれています。それに対して、江戸末期の越後の雪深い生活を描いた鈴木牧之は『北越雪譜』で、「越後の初雪と江戸の初雪とを比べれば、^{たかひ}楽と^{くるし}苦との雪泥の違いだ」と述べています。(1836)。

また、江戸末期にはオランダから顕微鏡が入ったり、雪の結晶のスケッチや成因を示す書物が入っています。当時、蘭学の影響を受けた知識人や大名が、花や虫など珍しいものをさかんにスケッチして残しています。富山県でも、10代藩主前田利保^{ビロウ}の植物や昆虫をスケッチ

した書物が残されています。また、石川県の大聖寺では、雪の結晶の模様がほどこされた刀のつばが残されていて、それが独自のものであるため、当時北陸でも雪の結晶を観察していた人がいるのではないかと推測されています。



利位の描いた雪の結晶

小林 禎作『雪華図説新考』より

そのような時代を背景に、雪の結晶を観察し続けた殿様がいます。茨城県古河の城主土井大炊頭利位です。1833年に著した『雪華図説』には88個の雪の結晶が、1840年に著した『続雪華図説』には97個の雪の結晶が載せられています。それは將軍徳川家斉、家慶にも献上されたたいへん好評だったということです。そこに描かれた雪の結晶は、『北越雪譜』に引用され民衆にも広まり、紋や模様としてもはやされました。この模様は大炊模様と呼ばれ、着物や手拭いにまたお菓子の模様にまで取り入れられたということです。

利位は観察に顕微鏡を用いていたと考えられていますが、『雪華図説』には黒塗りの漆器に結晶を受け、鏡で光を集めて観察していることが記されていて、その姿が目には浮かぶようです。

昔も今も変わりなく雪は降りますが、その見方や考え方は時代によって大きく変わるようです。（黒田久喜）



富山市科学文化センター

富山市西中野町1丁目8番31号（〒939）

電話 富山(0764) 91-2123(代表)

昭和63年 / / 月 / 日発行